

M-GTA 研究会 News Letter No. 63

編集・発行：M-GTA 研究会事務局（立教大学社会学部木下研究室）

メーリングリストのアドレス：grounded@ml.rikkyo.ac.jp

研究会のホームページ：<http://m-gta.jp/>

世話人：阿部正子、小倉啓子、木下康仁、小嶋章吾、坂本智代枝、佐川佳南枝、竹下浩、
塚原節子、都丸けい子、林葉子、水戸美津子、三輪久美子、山崎浩司（五十音順）

<目次>

◇第2回合同研究会の報告	・・・	1
◇近況報告：合同研究会に参加し	・・・	18
て		
◇編集後記	・・・	20

◇第2回合同研究会の報告

【日時】2012年8月25日（土）・26日（日）

【場所】札幌学院大学 S G Uホール他

【出席者】79名

浅川 典子（埼玉医科大学）・阿部 正子（長野県看護大学）・市江 和子（聖隷クリストファー大学）・伊藤 道明（子ども支援活動家）・伊藤 祐紀子（北海道医療大学）・犬丸 杏里（三重大学）・今井 尚義（大真大学）・打本 未来（兵庫教育大学大学院）・鶴木 恵子（十文字学園女子大学）・王 茜鈴（お茶の水女子大学）・大久保 義美（愛知みずほ大学）・大島 千佳（山梨県立大学）・尾久 裕紀（白梅学園大学）・小倉 啓子（ヤマザキ学園大学）・唐田 順子（西武文理大学）・木下 康仁（立教大学）・木谷 岐子（北海道大学）・栗原 良子（筑波大学）・小坂 恵美（千

葉大学)・小嶋 章吾(国際医療福祉大学)・小林 敬子(大正大学)・小松 洋平(西九州大学)・斎藤 まさ子(新潟青陵大学)・坂本 智代枝(大正大学)・佐川 佳南枝(熊本保健科学大学)・白柳 聡美(浜松医科大学)・杉原 努(佛教大学)・杉山 智江(埼玉医科大学)・高品 孝之(海道札幌北高校・北海道大学)・高丸 理香(お茶の水女子大学)・瀧澤 直子(東海大学医療技術短期大学)・竹下 浩(ベネッセ)・田中 智子(北里大学)・谷口 須美恵(青山学院大学)・玉城 清子(沖縄県立看護大学)・田村 朋子(立教大学)・樽矢 裕子(国立看護大学校)・丹野 ひろみ(桜美林大学)・塚原 節子(自治医科大学)・塚本 雪絵(順天堂大学)・都筑 千景(神戸市看護大学)・寺澤 法弘(日本福祉大学)・得津 慎子(関西福祉科学大学)・都丸 けい子(平成国際大学)・名嘉 一幾(兵庫教育大学)・長崎 和則(川崎医療福祉大学)・中西 啓介(信州大学)・中村 聡美(NTT 東日本関東病院)・長山 豊(金沢医科大学)・成木 弘子(国立保健医療科学院)・成島 ますみ(日本赤十字北海道看護大学)・新山 美和子(順天堂大学)・新田 雅子(札幌学院大学)・野村 佳子(摂南大学)・畑中 大路(九州大学)・馬場 洋介(株式会社リクルートキャリアコンサルティング)・林 葉子(お茶の水女子大学)・肥田 幸子(愛知東邦大学)・廣瀬 真理子(関西学院大学)・福島 美幸(大阪市立総合医療センター・大阪市立大学)・福元 公子(社会福祉士事務所ライトハウス)・藤田 史恵(久留米大学)・藤好 貴子(福岡女学院看護大学)・藤原 佑貴(科学警察研究所)・古村 美津代(久留米大学)・前田 和子(茨城キリスト教大学)・松戸 宏予(佛教大学)・美甘 きよ(筑波大学)・光村 実香(金沢大学)・水戸 美津子(自治医科大学)・宮城 純子(自治医科大学)・宮崎 貴久子(京都大学)・三輪 久美子(日本女子大学)・森谷 恭子(白梅学園大学)・山田 典子(札幌市立大学)・山野 則子(大阪府立大学)・横山 登志子(札幌学院大学)・吉田 ゆかり(札幌市立屯田北中学校 北海道教育大学)・渡邊 真理(札幌市立大学)

【グループ1】

DP 小倉啓子(臨床心理) SV 伊藤祐紀子(看護) 長崎和則(ソーシャルワーク)

「～北海道での合同研究会開催を終えて+1 グループのSVを担当して～」

伊藤祐紀子(北海道医療大学 看護福祉学部看護学科)

当初は、各地研究会の皆様避暑地感覚で北海道に来て頂いて、涼やかに研究会ができればと思っていました。しかし、それは果敢無い妄想でした。開催両日は猛暑に湿度も加わり、本州の夏と変わらないような気候。日を遮るカーテンと窓からそよぐ自然の風をたよりに、暑い暑いワークショップが繰り広げられました。

私は、開催地実行委員代表をさせていただきながら川崎医療福祉大学の長崎和則先生とともに 1 グループのSVをさせていただきました。DPは、ヤマザキ学園大学の小倉啓子先生が務めて下さり、特養での看取りを体験した家族のデータをご提示いただきました。主たる進行は長崎先生にお願いし、私はサブとして参加者の発言を黒板に記録したり、小グループでの分析のSVの役割をさせていただきました。

印象的だったのは、ワークショップの導入にあたり、データを読んで「気になったこと」を参加者から発言してもらい、その1つ1つをSV、DP間で丁寧にやり取りしていったところです。その内容は、実に様々（研究の背景、インタビューガイドの詳細、データの内容、分析の範囲、対象者の気持ち・感情などなど）多岐におよび、これらはどう整理されていくのかと思いながら汗だくで板書していました。黒板が文字でほぼ埋め尽くされた頃、「分析テーマらしきもの」「分析焦点者は誰」というあたりが不思議と浮かび上がってきたのです。この丁寧なやり取りのプロセスがあったからこそ、一応設定された分析テーマ、分析焦点者にフィットして、小グループでの概念生成を進めることができたのだと思いました。

小グループの作業で大事にしたのは、この分析テーマのコアになりそうな概念から生成することです。この概念は何を意味しているのか、なぜにコアなのか、この概念に影響することは何か、その関連から新たな概念が生まれるのか吟味しながら作業を進めていきました。最終的には生成したいくつかの概念をもとに関連図を描き、ストーリーラインまでを表現するに至りました。

参加者からは、「データを類似性で集めて、バリエーション欄を構成するのではないことが分かった」「生成した1つの概念に問いを立て、検討することの大事さが分かった」などの感想をいただきました。SVとしてまだまだ未熟者で初心者マークが取れない私ですが、ワークショップのセッションごとにペアのSV、DPそして参加者の皆様から学ばせていただいていることを実感いたします。

最後に開催地実行委員代表として、無事に合同研究会を終えることができましたことを感謝申し上げます。国際医療福祉大学 小島章吾先生をはじめ世話人会の皆様、はるばる北海道まで来て下さった参加者の皆様、当日協力くださった北海道研究会のメンバーの皆様、ご協力いただき誠にありがとうございました。

新たに形成されたネットワークが継続、発展するためにも、この合同研究会が継続されていくことを願っております。



【グループ2】

DP 佐川佳南枝（作業療法）SV 都筑千景（看護）・坂本智代枝（ソーシャルワーク）

「第2回合同研究会 ワークショップ SVを通して」

坂本智代枝（大正大学）

今回の合同研究会は、木下先生の講義の中で強調されていた「分析テーマの絞込み」等のポイントを次のワークショップに活かすことができた。特に、ワークショップのSVを通して、1つのデータから多くの発想をもつことのおもしろさと自分自身のイマジネーションを活発にする刺激的な時間であった。それには、以下の3点が大きな要素だったと思う。

1つ目は、参加者の研究に対する意識が高いこと。今回、時間に余裕もあったことと、ウォーミングアップを兼ねて自己紹介の時に、①取り組んでいる研究テーマ②M-GTAで疑問に思っていること③今回の参加で期待することについて、報告していただいた。そのことから、参加者の「研究する人」としての背景が理解でき、参加している方々の研究に対する熱意からたいへん大きな刺激を受けた。

2つ目は、参加者の準備がたいへんすばらしかったこと。時間が短いながらも、読み込まれている印象を受けた。データを読む時に必要になることとして、「どんなことが豊富に語られているのか」、「どこの語りがおもしろいところなのか」といった「研究する人間」の着眼点が重要である。参加者が自由にその着眼点を共有することができたと思う。

3つ目は、発想力やアイデアを共有すること。SVとして、時間の余裕がありながらも、作

業の進行を急いでしまったことは反省点であった。しかし、それをしっかりとくいとめるかのように参加者の発想が豊かに共有されていたので、重要な「分析テーマの絞込み」の検討がしっかりとできた。参加者ひとりひとりがSVになって、ピア・スーパービジョンとして機能していた。

最後に、私が学務のため1日目のSVのみの参加となり、参加者及びデータ提供者の佐川先生、SVの都築先生にはご迷惑をおかけしたことをお詫びしたい。



【グループ3】

DP 阿部正子（看護）SV 小嶋章吾（ソーシャルワーク）・藤好貴子（看護）

「M-GTA 研究会 第2回合同研究会を終えて」

藤好貴子（福岡女学院看護大学）

このたびはM-GTA 合同研究会にてSVとして参加させていただき、貴重な経験をさせていただきました。事前の打ち合わせをSV小嶋先生、DP阿部先生と行い、ワークショップに参加される方には分析のプロセスを実感していただくように進めていくようにしました。SVとして小嶋先生が進行、藤好が書記としての役割を決めました。

1日目、全員の自己紹介から始めましたが、研究会に所属の方、実際に論文でM-GTAを用いた経験がある方、初学の方と様々な方がいらっしゃいました。初めにDP阿部先生より研究概要の説明をしていただき、2種類ある逐語録から今回はどちらのデータをメインに見ていくかを決定しました。どのようなデータだと分析が開始しやすいのかが疑問として上が

り、語りの量や読み易さ、他者との関係性やプロセスの存在がありそうなデータなど着目した点を出し合い、使用するデータを決定しました。その後、分析テーマの設定を行いましたが、この部分はしっかりと検討をしていくこととなりました。初めに各自考えた分析テーマを発表しましたが、用いる言葉一つにしてもその言葉自体の概念が大きいと分析の方向性がわかりにくい、分析テーマを絞り込みすぎるとデータの重要な部分を切り捨てる結果に繋がりそうなど、検討を重ね 2 時間ほどかけ決定しました。同時に分析焦点者も決定し、その後各自 1 つの概念を生成するところで 1 日目は終了しました。

2 日目、昨日の学びを振り返った後、宿題として各自で生成した概念を発表しました。1 日目に分析テーマの設定をしっかりと検討したため、概念生成はスムーズにできた印象です。26 の概念が生成され、同じヴァリエーションをとらえている概念、定義が似通っている概念など共通性を確認し、概念間の関係性を検討しました。その後短時間となってしまいましたが、結果図とストーリーラインを作成するところまで行うことができました。

実際に分析のプロセスを、データを用いて様々な方と検討することは大変貴重な経験です。分析テーマ、分析焦点者の設定は特に丁寧に行うと思っていても、時にデータに向き合う中で迷いが出てきてしまうこともあると思います。また、自分ではこれが最も良い設定だと思っていても、データに引きずられ重要なプロセスを見落としてしまうこともあるのではないのでしょうか。ワークショップでは各専門領域の方のなかで、しっかりと分析をしていきました。分野が異なることで様々な視点から考えることができますし、それが思いもかけない閃きに繋がります。研究時の悩みや自身の研究の方向性など、M-GTA を学ぶ者同士語り合うことも大切な学びの場となりました。今回、SV として貴重な場を与えていただいた皆様に感謝したいと思っております。



【グループ4】**DP 横山登志子（ソーシャルワーク）SV 竹下 浩（経営）・藤田史恵（看護）****SV コメント（ベネッセコーポレーション 竹下 浩）**

横山先生に素晴らしい研究計画とデータを2例もご提供頂いたおかげで、充実したワークショップになりました。2つの班に分け、藤田先生には主に2班のSVと、全体の進行について多くのサポートと助言を頂きました。お二人とも有難うございました。メンバーの皆さんも、事前課題について全員が精力的に取り組まれただけでなく、ワークショップの間中、それぞれの役割に加え、積極的にご発言頂き、お礼申し上げます。

最初に、みなさんに研究テーマと分析テーマを板書・説明して頂きました。ここで幾つか体験がありました。例えば、前から気になっていた研究テーマと分析テーマの関係、それから、これは最後まで共通なのですが、他者のアウトプットと比較することで、自分の考えを明確化することです。

1日目の宿題（2例目のデータの読み込み）では、「データに基づく」ということがどんなことか—本で読んで頭では理解したつもりになっていたが、実際の行動（思考）としてできていたかどうか—が、はっきりしました。進行中の分析テーマに引きずられて、データを検索・分類してしまったか、それとも、逆に、データから分析テーマを再検討するような概念が浮上したか、少なくともそうしようとしたか、の違いです。

2日目は、「言葉にすること」の難しさも、体感して頂きました。「こうあるべきだ」「こう思う」ではなく、分析テーマとして、一言で言い切る、ということでした。とても言いにくいのですが、それでも、言葉にしてみる。この辺りは、初めての概念生成と同じで、このようなワークショップがほんとうに役に立つ部分です。

集中的なチーム討議に続き、最後の結果発表では、分析テーマと、理論的メモ（概念間関係の図示として）を模造紙で説明、全員が周りを囲んで質疑応答しました。木下先生からいただいた言葉は、4班全員の宝物となりました。またこのメンバーでやりたいですね。今回のワークショップが、みなさんの研究のご発展に、少しでもお役にたてば幸いです。有難うございました。

SV コメント（久留米大学医学部看護学科 藤田 史恵）

今回、竹下先生に引っ張って頂き、ご指導頂きながらではありましたが、SVという貴重な体験をさせて頂き大変勉強になりました。ありがとうございました。横山先生のインタビュー内容がたいへん興味深く、4グループのワークショップに参加させて頂いたことを光栄に思っております。

今回のワークショップは、参加者を2グループに分け、それぞれのグループで分析テーマを決定し、概念生成を試みました。2グループに分けたことは、同じデータであっても分析テーマの違いによって結果も変わってくるということを参加者の方に身を持って体験して

頂けたのではないかと思います。今回、参加者の所属（専門分野）も様々で、それぞれの立場から各グループで積極的に意見を出し合い、ディスカッションを深めることができ有意義な時間が持てたのではないかと思います。

今回、参加者のみなさんに一人分のデータを読み自分なりに分析テーマ設定と概念生成を行いワークショップに臨んで頂きました。ワークショップ 1 日目で、各自が考えてきた分析テーマを発表してもらい、最終的にグループで話し合っグループ毎に分析テーマを設定してもらいました。1 日目のワークショップ終了後には 2 人目の方のデータを追加し、2 日目のデータを読んでくることを 1 日目の夜の宿題としました。2 日目のワークショップでは、1 グループが分析テーマの設定をしなおすという作業に入っていました。分析テーマは分析していく中で微調整していくことは必要になってくるので、その体験が出来たというのは大変意義深いとは思いますが、短いワークショップの時間の中では少し時間がもったいなかったように思いました。次回は、一人分のデータのみで最後まで通すのか、あるいは 2 人分のデータを使用する場合は、最初から 2 人分のデータを参加者に読んでもらってから分析テーマを設定していくという方法をとっていくのがいいような印象を受けました。

参加者の方も積極的に楽しくディスカッションに参加されており、大変有意義なワークショップになったように思います。本当にありがとうございました。

横山先生、竹下先生、ご指導ありがとうございました。

DP コメント（札幌学院大学 横山 登志子）

まずは、第 2 回合同研究会を札幌学院大学で開催でき、無事、終了できたことに感謝申し上げます。開催地の準備は北海道医療大学の伊藤先生を中心に進めてまいりましたが、全国から参加者の皆様が「宿題」を抱えて熱く交流しておられる様子を拝見してうれしく思いました。

さて、DP としては初めての経験でしたが、参加者のみなさんの多様な背景から出てくる意見や解釈を伺うことができ大変、勉強になりました。時間がないという言い訳で 1 年ほどお蔵入りしていたデータに、もういちど向き合うことができました。自分だけでは全く気付かなかった点や、一緒に検討することでなんとなくみえてきたことがたくさんあり、解釈のオープン化を体験しました。リッチなデータを前に、どうしていいものやら・・・と、うろうろしていた状態から、参加者の方の熱心に取り組む姿を見せていただき、また、意見もいただき、分析に集中したいと思うようになりました。

合同研究会では今後もこのようなグループでの分析のワークショップが継続されると思いますが、DP の立場として感じたことを少し書きたいと思います。まず、事前に計画書やデータの配信をしていただき、SV より宿題もあったために、研究会ではすぐに分析の宿題報告から入れたことは限られた時間のなかでよかったと思います。また、DP の立場でグループの作業にどのように関与すればいいかについては若干、悩むところでした。グルー

プの討議を聞いて必要に応じて情報を伝える、検討の進め方について助言するという最低限の関与でしたが、もうすこし何かあったのかもしれないと思います。

ところで、DP として参加してみると、参加者の方たちの参加の仕方と、SV の方の進め方が両方、よく見えました。なかでも竹下先生と藤田先生の進め方には大変学ぶことができました。なにが良かったのかをまとめたいと思います。①参加者の小グループごとのダイナミズムをうまく促進するような歯切れのよい助言と、ユーモア、②今、何をやっているのかをその都度、黒板に書いたり、説明したりしながら意識的に伝えておられたこと、③教育的な助言とグループへの「おまかせ」のバランスがよかったこと。これはずっと SV が張り付いて検討を進めるのではなく、いったんグループの司会者（リーダー）にまかせながら必要に応じてフォローするというものでした。④限られた時間内での時間管理とエンパワメントの姿勢。これらは、今後、SV をする立場になったときに是非、いかしたいと思うことでした。

SV のあり方というのはひとつではないと思いますし、各自が自分なりの方法を見出すのでしょうけれども、ひとつのロールモデルをみせていただいたという感じがしております。

SV の先生と、参加者のみなさまにお礼もうしあげます。ありがとうございました。



【グループ5】**DP 山野則子（ソーシャルワーク）SV 水戸美津子（看護）・都丸けい子（臨床心理）**

「第2回合同研究会を終えて」

都丸けい子（平成国際大学）

運営に携わった先生方を始め、参加者された皆さま、本当にお疲れ様でした。参加者全員の方のご尽力とご意欲のもと、大変有意義な2日間となったと思います。2日間にわたったワークショップでは、私は水戸先生と一緒にスーパーヴィザーを担わせていただきました。ワークショップでのスーパーヴィザー経験は初めてでしたので、司会進行をお引き受け下さった水戸先生の存在は心強く、またスーパーヴィザーの役割に関しても大変多くを学ばせていただき、心より感謝申し上げます。

以下、ワークショップに関してご報告させていただきます。

1日目は、データをご提供いただいた山野先生より、研究の背景と目的をご説明いただくことから始まりました。ご提供いただきましたデータは、とても豊富な内容を含んでおり、分析テーマの立ち上げに多くの時間が費やされました。今回のワークショップで、この点はとても重要であったと思っております。参加された皆様の研究分野やご関心は様々でした。だからこそ、初めはそれぞれの方の問題意識に照らし合わされた多様な分析テーマが提案されました。しかし、分析テーマを立ち上げるにあたって大切なポイントは、研究する主体の問題意識と実際のデータ（分析焦点者も含む）のすり合わせにあります。分析テーマを見定めていく中で、山野先生にご説明いただいた研究の意義および目的を把握し、それを頭の片隅に留めながらデータと向き合う姿勢を体験できたことは、分析テーマを立ち上げる際に大切な上記のポイントを自ずと示唆することになったと考えております。

2日目に中心となったのは、初日に立ちあげ皆で共有した分析テーマに沿って、概念を生成する作業です。分析テーマを意識しながら、分析焦点者の視点に立った解釈を進めていく作業が丁寧かつ緻密になされました。そこで水戸先生から何度も繰り返しご確認いただいた点は、思考過程を言語化することの重要性でした。これは今回のワークショップのように集団で検討を行う際のみならず、個人で作業を進めていく際のポイントでもあり、また、概念生成のみならず、M-GTAの分析過程全体に通じるポイントでもあると感じました。つぶやき、書きとめ、絶えず軌跡を残すことは、実際の分析過程においては理論的メモや理論的メモ・ノートとして積み重ねられていきます。

最後に、ワークショップ全体を通し、私自身にとって大変興味深かった点は、じっくり・丁寧に・時間をかけて作業すべき点と（暫定的に）判断・決断し作業を進めていくべき点のメリハリとその行き来のダイナミクスでした。その二つをつなげるのは、先に挙げた「頭の中にあることを外へ（＝言語化）！」なのだと思います。大変貴重な経験となりました。



【グループ6】

DP 林葉子（社会学）塚原節子（看護）・三輪久美子（ソーシャルワーク）

【ワークショップの勧め方】

I. 分析テーマ

何を分析テーマにしていくか

エンドポイントは何か

ワークライフバランス（WLB）をとれている状態になっていくプロセス

*KさんとHさん、どちらのデータを使うかについて

Kさんは変容が見つけにくいデータではないか

役割の調整というかんじではない

役割調整とあるが、時間のやりくりよりは、具体的なものなので、子育てのための生活のやりくりをしていくといったほうがいい

希望でいうとKさんは自分の世界をもっているの、Hさんのほうが、解釈するときにしやすそう。

前提が理解できないところ 夫が参加しないという前提があってそこからきているもの。

Kさんは変わっていない、浅いところでかわらない。Hさんのほうが深いところでかわろうとしている。新しい父親像をつくろうとしているかんじがする。

父親像というキーワード

職場としていい状態のところで、家庭と育児が調和させている印象がある。家庭内の役

割を調整するより、奥さんとのやりとりがKさんのデータから受け取れないので、Hさんのほうがプロセス性がでくるのではないか。

方法論的な確認、分析テーマの確認 分析テーマをきめるということは何か？

役割が定着していること。土日は出番、男の子だから僕がやる うれしそうにしている息子といい関係をつくりそうな人であること

Hさんは心の動きが見える。Kさんは機械的このころの動きがみえない。自分もこういうのならいけるというところが

だんだん子育てしていかなくなるだろう。

父親役割を、獲得していける人に行けない人

夫と仕事、夫と妻、子どもの相互関係を見ていった。

子育て役割はしている（kさん）Kさんから得られるものもあるのか？この人も子育てをしているのだ。

Hさんは、獲得していく、教育されてからWLB感覚ができた。Kさんは一般的な人、よりよく意識のプロセスがみえるのはHさんだが、一般論だとKさんのほうがいいかも

子育ての同士にいたる変容とHさんはいえるが、Kさんはいえない。

→Hさんのデータを使うことに決定

分析テーマ

父親像獲得プロセス 分析テーマに価値観的言葉をいれていいのか？

家事と育児の調整プロセス

参加しやすい環境

フルタイム共働き世帯の男性が、子育て参加を確立していくプロセス（全体を含めて、大きくみていく）

参加を確立していくプロセス → エンドポイントが見える分析テーマが必要だと思うから

男性のインタビューのデータは、単純で、初学者には扱いやすいデータであったのか、1時間ほどで、分析テーマが決定した。

Ⅱ. 概念生成

グループワークを実施。

第1グループ

1. 決定した分析テーマに即して事例を読む（30分間）

まったく初めての方が1名。事例を読んで、概念を生成する方法がわからないという質問があったので、読み込んでいくということはどういうことかを説明した。

2. 概念を作成する

3. 読んだあと、それぞれ作った概念を説明していった。定義とヴァリエーションを示す。

その後、概念名をポストイットに記入。机にポストイットを張っていった

4. 全員が1～2個の概念を発表できた。最終的に、8個の概念を生成

妻からの声掛け

奥さんとの話し合い 話し合って理解する

ステップごとに話し合う

同じ歩幅で

妻を勘定にいれて 奥さんの仕事や子育ての貢献度を考えにいれて自分の子育て頻度を調整する

お父さんとして自分しかできないこと

父親にしかできないこと：自分の子育てに参加していることを強調していること、僕はここをやっていること（エンドポイントになりうる概念）

子育てを返す 自分も子どものころには父親にやってもらっていたことを思い出して父親役割に重きをおく：比重の置くところが変わった 仕事から子どもに

新しい幸せを見つける 自分の仕事、出世より子どもの成長

反面教師 自分の父親

本：自分をプッシュしてくれる存在として 自分の行動を肯定する材料 自分を安心、納得させるもの

多少は揺れているところもある

家事の連携プレー

現行制度のフル活用

第2グループ

1. 30分ほど読み込んで、それぞれ分析ワークシートを用いて概念を作成していった。
2. まず一人の人に自分が着目したデータの箇所を示してもらい、何故自分がそこに着目したのか、その着目したデータ部分をどのように解釈して定義したのか、どのような概念をつけたのかについて発表してもらった。
3. そこで、同じ箇所に着目した人がいないか聞いたところ何人かいたので、それぞれ定義と概念を発表してもらい、お互いに意見を出し合いながら、定義と概念名を丁寧に検討していった。その上で全員が納得のいく概念に完成させ、ヴァリエーションについても一つずつ確認していった。
4. 他の概念についても同様の方法を全員で検討しながら概念生成を進めた。（時間の関係で、全員で検討して一つの概念につくり上げることができたのは2つ）
5. グループ全員でつくり上げた概念と各自それぞれがつくった概念すべてをポストイットに記入した（一人につき一つ以上の概念が生成された）

合同検討

それぞれのグループで生成された概念を、製作者が説明した。

その後、ポストイットの貼ってある中央の机のまわりをかこんで（立って）、話し合っ、ポストイットに書いてある概念が、同じ意味を示しているのか、独立した概念なのかを検討し、ポストイットを並べなおした。同じような概念はまとめたり、削ったり、名前を変えたりした

一度、破棄しても、復活する概念もあった

最終的に 15 個の概念が生成されたが、ヴァリエーションが重なっているものもあり、2 日目までに、決定された概念のワークシートを提案者が作成してくることとなった。さらに、追加の概念も考え、あらたな概念生成もしてくることを宿題とした。

概念生成

- ・子育てを返す：自分も父親にみてもらっていたこと
- ・ステップごとに話し合う：子育ての節目には妻と話し合いをおこなっていたこと
- ・現行制度のフル活用：妻も夫も会社の制度を使っていること
- ・新しい幸せを見つける：仕事で生きていたが、家庭に幸せをみいだしていく
- ・家事の連携プレー：家事を妻と夫でバトンパスをするように、協力をして家事をしている状況

- ・妻を勘定にいれて：自分の子育て参加を妻ありきで考えていること
- ・自分の行動を肯定する：本などをうけて自分の子育て参加を肯定すること
- ・自分にしかできない：父親として自分にしかできないことを確立していること（エンドポイントになる可能性がある、楽しいように父親をやっているポジティブ）
- ・会社システムの現実的な利用：制度を利用していること
- ・職務内容による視野の広がり：組合の仕事で WLB に関する自分が知識を得て変わっていくこと
- ・夫婦の話し合いによる協働：夫婦の話し合いによって、子育てしやすい環境を作っていくこと
- ・子どもへの積極的なかわり：子どもと遊んだり、教育に積極的に参加していること
- ・父親が自らできる子育てを選ぶ：自分ができる子育て内容を自ら選択すること
- ・妻への補完的な役割を担う：妻への役割や考えを踏まえて、妻の役割を和らげるように家事・育児に参加する、（妻がやれないことをやる）
- ・子どもと相互承認に基づく役割獲得：子どもとの直接的相互作用を通した、相互承認を通して、始めて親役割を獲得する（子供と一緒に育てながら自分も父親役割が育っていくこと）（15 個）

決定概念

- ・家庭役割の連携プレー
- ・妻を勘定にいれて

- ・妻の補完的な役割を担う
- ・現行制度のフル活用
- ・夫婦の話し合いによる共働
- ・子育てを返す
- ・自分の行動を肯定する
- ・職務内容による視野の広がり
- ・現行制度のフル活用
- ・新しい幸せを見つける
- ・子どもの相互承認に基づく役割獲得
- ・子どもへの積極的なかわり

1 日目の印象

・初学者が少なく、一度、M-GTA で、論文をかいたことのある人がいたので、概念生成のコツを語りながら、概念を説明してくれたので、概念生成の方法が、実況中継のように述べられて、概念生成方法がその他の人にとってもわかりやすかった。また、それに刺激されて、自分が注目した箇所の概念生成が進んだものもいた。グループダイナミクスが働いたように思う。

- ・一人ひとりが、臆することなく発言できた。
- ・5人という小集団でしたのは良かったと思う。
- ・三輪さんが、ポストイットを用意してくださったのは、とてもよかった。それを使って、概念感の関係やプロセスを、ポストイットを動かすことによって、眺めながら、検討ができた。眺めていると、やっぱり、これとこれは、一緒の意味を表している概念だ、とか、カテゴリーになりうる概念だとか、それぞれの概念の関係性が、可視化できた。

Ⅲ. 概念間の関係、カテゴリー化、関係図の作成

1. 昨日の宿題で作成した概念をポストイットに書き、真ん中に机を寄せて、その上にはりつけた。(昨日、概念を生成しながら、置いていった位置に、再度、写真をみながら置いた)
2. 宿題のワークシートを全員にコピーして私、同じヴァリエーションのある概念同志を検討して、一つにしたり、2つに分けたりして、精査していった。
3. 概念は全部出し切っていなかったが、最後まで体験するために、これまでに生成した概念のみを用いて、概念間の関係性を検討する作業に入った。
4. 全員で、決定した概念の書かれたポストイットのはったテーブルを囲んだ。まず、自分の生成した概念を説明し、他の概念との位置関係を、テーブルの上で検討していった。
5. 概念間を検討するうちに、概念どうしの位置関係や、概念のまとまりが自然にできていく様子を体験した。実際に概念のポストイットを動かすと、概念から概念への動きが鮮

明になる。

6. 概念が自然にまとまったところをカテゴリーとして、色の違うポストイットにカテゴリー名を記していった。
7. 概念どうしの関係性は、参加者の一人が、矢印型のポストイットを提供してくださって、それを張ることで、可視化でき、関係図が机の上に描かれていった。
8. 最後に今回のワークショップの感想を述べてもらった。

2 日目の印象

全員が、意見を言える環境になっていた。また、ポストイットと矢印を使用することで、頭の中で作業するより、“体”で、概念間の関係性や、カテゴリー化、関係図作成を体験することができたと思う。体と手を動かすことで、思考も活発になり、意見もどんどん出てきたし、建設的に意見交換ができた。

木下先生のご著書にある「概念間の位置づけが見えてくる」、「カテゴリーが浮上してくる」ということを、実体験できたのではないだろうか。初学者から、経験者まで、いろいろなレベルの参加者であったが、それぞれが、その人のレベルで学ぶことができたのではないかと思う。

IV. 参加者の感想

・成木さん：自分の論文は不消化だったが、今回、わかったところが多かった。5つくらいの疑問が解けて、学びが多かった。メンバーがよかった。

・新田さん：実際にやったことがなかったが、やってみて面白く、やってみたくなった。参加してよかった。有意義だった

中西さん：作るところまでだったので、その後がわからなかったが、今回は、作り方、本では得られないところがわかりよかった。

・長山さん：データを読んできて、ディスカッションをして、全体で会話しながら、つくっていったのは、よかった。

・新山さん：現在、データ収集しているところだが、苦しく、やめたいと思った時期もあったが、参加して、いろんな人の解釈の仕方とか勉強になったので、こういう見方をしたら、こう解釈できるということを勉強できて、光が見えてきて有意義だった。

・大島さん：これからやろうとしていたので、初学者ではあったが、考え方とかやり方が、本から得られなかったことが見えてきた。今回は、大きな概念を作りがちだったが、来年は、ステップアップしたい。

・森谷さん：実践を通して、自分がやっているやり方に自信ができた。みなさんと、であって、この場をとおした人間関係も得られてよかった。

・大久保さん：大変だったが、充実感もあった。自分の研究の実験の世界からみると、新鮮で、わくわくした。自分も訓練して、方法論として使いたくなった。

・丹野さん：孤独な作業だったし、本のみが頼りだったので、使い方を迷っている部分も

あったが、そこらへんが、明確になったし、本（M-GTAの本）の読み方がふかく、豊になると思った。

・松戸さん：研修をとうして、振り返りができた。発想の転換を知った。個人では固まるけれど、ほかの人の意見を聞いて、発想の柔軟さに刺激を受けた。実際のやり方が確認できた。ほかの研究にも応用できると思った。

V. SV 三輪久美子コメント

今回の合同研究会では、SV として、また、M-GTA を用いて研究を行う者の一人として、大変多くのことを学ばせていただきました。

第 6 グループでは、男性の育児参加という今日的課題について、林先生のデータをもとに分析を行いました。

第一日目は、まず 5 名ずつ 2 つのグループに分かれて概念生成を行いました。私のグループでは、30 分ほど各自でデータを読み込み、分析ワークシートを用いて概念を生成していきました。その後、ひとりの方に自分が着目したデータの箇所を示していただき、なぜその箇所に着目したのか、その着目した部分をどのように解釈し定義したのか、どのような概念をつけたのかについて発表していただきました。そのあと、他の方で同じ箇所に着目した方がいないかどうか尋ねたところ、何人かいらしたので、それぞれどのように解釈したのか、どのような概念をつけたのかを発表していただきました。同じデータ部分であっても解釈の仕方や重点のおき方に違いがあったりするなど、お互いに新しい気づきを得ながら意見を出し合い、最終的に全員が納得のいく概念へと完成させていきました。自分とは異なる視点を取り入れながら解釈を深めていくことができたのではないかと思います。

2 つのグループに分かれて概念生成を行った後は、生成された全概念と概念間の関係の検討を第 6 グループのメンバー全員で行いました。概念名を記したポストイットをテーブルの上に貼り、そのテーブルをみんなで囲んで、ポストイットをあちこちに移動させながら概念間の関係を検討していきました。こうして実際に概念を移動させながらお互いに意見を述べ合っていく過程において、カテゴリー名が浮かび上がってきたり、全体像も少しずつ見えてくるなど、思考のプロセス（“あたり”をつけていくプロセス）もメンバー全員で共有できたように思います。

今回のワークショップは、頭だけではなく体も動かすことによってプロセスのうごきをとらえていくという、まさに M-GTA の醍醐味を体感することができたワークショップとなりました。普段、自分自身の研究においてひとりでデータに向き合っていると、だんだん煮詰まってきて袋小路に入り込んでしまったような感覚を覚えることがありますが、そうした時には今回のワークショップのことを思い出して、“ひとりワークショップ”をしてみようと思っています。

塚原先生、林先生、第 6 グループの皆さまとご一緒に、本当に素晴らしい経験をさせていただきました。心より感謝申し上げます。



◇近況報告：合同研究会に参加して

「合同研究会 in 北海道」に参加して」

名嘉 一幾

私が、第2回 M-GTA 合同研究会への参加を決めたのは、木下先生の著書や M-GTA を用いた論考を拝読する中で、常に付きまとう「果たして自分の解釈はこれで正しいのだろうか」という方法論の理解に対する不安を少しでも払拭したいと考えたからです。結果、本当に参加できてよかったと思っています。「よかった」と感じる背景には、何ととっても概念生成を体験できたワークショップがあります。

私は、小倉先生(DP)、伊藤先生、長崎先生(SV)のグループで学習をすることができました。自分にとって、「特別養護老人ホームにおける看とり」というテーマは、あまり馴染みのない内容でしたが、冒頭のグループ全体でのフリーディスカッションは、内容を咀嚼し、ある程度のところまでデータを理解するのに大いに役立ちました。提供いただいたデータは事前に読み込んでおりましたが、このフリーディスカッションで多くの気づきを得ることができました。

その後行われた小グループ(4~5名)の分析演習では、概念生成を体験することができました。これまで半信半疑の自主学習を続けていたため、なかなか踏み出すことができずにいた作業でしたが、伊藤先生の懇切丁寧なスーパーバイズと、グループメンバーであった市江

先生、肥田先生、山田先生との温かく和やかな雰囲気の中での議論により、なんとか思考を巡らせながら概念(候補)を形作っていく作業を経験することができました。

最終報告では、同一のデータと分析テーマを共有しているにも関わらず、グループによって生成された概念や結果図に多少の相違点があり、それらを比較することができ、とても興味深かったです。

真夏の札幌での2日間は、自分にとって“学びたいと思っていたことを学ぶことができた”、とても充実度の高い2日間であったと振り返っております。また、分野の違う方々が集う、“異分野交流”も M-GTA 研究会の醍醐味であることを実感することができました。

現在手元にあるデータについて、今回学んだ内容を自分なりに整理して、今後の分析に役立ててまいりたいと考えております。私事で恐縮いたしますが、この度、人生初となった北海道訪問を M-GTA 研究会で迎えられたことを大変光栄に感じております。一参加者として、第2回合同研究会の開催にご尽力くださった先生方に心から感謝申し上げます。

.....

「M-GTA との出会いそして合同研究会 in 北海道からの新たな取り組みへの挑戦」

藤原 祐貴

初めまして。私はこの 4 月より、一研究員として、非行や子どもの犯罪被害に関わる研究に携わっております。M-GTA 研究会に入会させていただいたのも今年度からですが、それは仕事のためではなく、学生時代のデータを活かして形にしないと、このままではインタビュー協力者の方々に申し訳ないとの思いからです。

私は修士の時に、非行を経験した元少年たちが、どのような他者との関わりを持ち、変容プロセスをたどってきたのかということに関心を持ちました。そこで質的研究の方法論を勉強するうちに M-GTA に出会い、これは他者との関係性の中での変化プロセスを捉えることが出来るという点で、まさに私が見たいものを分析出来る方法だと、感銘を受けました。しかし、その時には研究会の存在を知らず、木下先生の本を読ませていただきながら、何とか手探りで分析を行いました。この経験により、きちんと M-GTA を学んで、データの再分析を行いたいという強い思いが、私の中に残りました。

さて、このような動機を持って、私は 8 月の合同研究会 in 北海道に参加させていただきました。感想を述べさせていただくとすれば、参加して良かったという言葉に尽きるのですが、その理由は主に 2 つあります。1 つは、分析テーマを設定し、概念を生成し、その関連性を検討しながら全体としてまとめていくという分析の流れを、実際に体験することが出来たことです。合同研究会では、グループで様々な意見を出し合い、分析に取り組んだのですが、どのように考え、進めていくのかということを、まさに身をもって学ぶことが出来ました。こう分析を行えば良いのだという見本を見せていただいたようで、『なるほど』

の連続でした。もう1つは、M-GTAを用いて研究をされている方々と、分野を越えて交流出来たことです。グループで刺激を受けただけでなく、その他の時間でも、アドバイスをいただいたりお話を聞かせていただいたりすることで、勉強させていただき、それが励みにもなりました。更には、他分野の現場や研究のお話を聞かせていただく中で、これまで接点のなかった分野について学んだり、異なる領域との意外な共通点を見出したりすることもありました。

以上の理由から、私は合同研究会に参加して、本当に良かったと思います。参加するまでは、再分析をしようにもどうしたらいいものやら、全然前が見えないような状態でした。しかしこの合同研究会を終えて、今は少し希望と前に進む勇気を持てている気がします。また同じような機会があれば、ぜひ参加させていただきたいと思います。そして、多くの方々とお話出来たら嬉しいです。最後になりましたが、このような機会を設けてくださった研究会関係者の皆さまに、厚く御礼を申し上げます。ありがとうございました。これからもどうぞ宜しくお願い致します。

◇編集後記

・今年の合同研究会も無事終わりました。北海道の委員の皆様、合同研究会の委員の皆様、準備や運営など、いろいろとお世話をいただき、有難うございました。各、SV・DPの皆さまから、コメントをいただきましたが、順調に会を進めることができ、参加者の方々とともに良いワークショップをすることができた様子が窺えました。おいしい北海道料理もいただき、楽しい夜も過ごすことができました。有難うございました。(林)

